

2024 年 11 月号の「国際公共神学ジャーナル」特集より

イスラエル/パレスチナに関する声明

公共神学グローバルネットワーク委員会

今日、ローカルな内容についてグローバルな視点から公共的な諸議論がなされている。そのことへの神学的寄与を推進するために GNPT（公共神学グローバルネットワーク）は存在している。我々は、キリスト教の公共的討論について学問的交換がなされるような場を提供しているグループである。

2023 年 10 月 20 日に 12 人のパレスチナ人のキリスト教機関が「西洋教会の指導者たちと神学者たちへ」と題する公開書簡を出した。特に彼らは、聖書がパレスチナ人の抑圧を正当化する形で武器化されている、と注意を促し、かつ教会指導者たちと神学者たちに悔改めるように要請している。

この書簡が書かれたのは、10 月 7 日のハマスのイスラエル攻撃への報復として行われたイスラエルのガザへの爆撃のあった直後である。もちろん我々はどちらの側に対しても、民間人を巻き込む戦闘を非難している。この現在の対立は、これまでの 75 年にもわたる（国連基準での定義による）イスラエルの不法占拠と人種差別にあるのであって、すでにこの報復によるパレスチナ人犠牲者は死者が 42000 人（ほとんどが女性と子ども）、けが人が 97000 人以上で彼らも飢餓、感染症、病気によって死の危険性にさらされている。国際司法裁判所はガザへの空爆をジェノサイドに相当するとし、ヨルダン川西岸の住民への暴力行為の増大を非難している。国連はイスラエルへの武器の売買を止めるように、またイスラエルへの制裁の適用を要求している。神学者たちのグローバルネットワークとして、我々は抑圧を正当化する神学の使用に反対するし、同時に反ユダヤ主義にもイスラーム教敵視にも反対する。我々はすべての宗教の信者たちに対する正義と平和を要求する。我々はパレスチナとレバノンそしてより広い中東に暴力が広がっていくことを憂えている。我々は国際社会が国際法を順守してすみやかに永久の停戦をもたらすことを要求する。我々はイスラエル人の人質解放とパレスチナ人の自由とを要求する。我々はネットワークのメンバーに対して、現在の苦痛を止めるためにできることは何でもやること、そして正しい平和的な解決に向けて、学問的作業、奉仕的支援、公共的表明といった仕事をしていくことを要求する。

GNPT 委員会

2024 年 10 月 24 日

特集「対立の中における公共神学」編集委員会

巻頭言

本号はいくつかの対立や紛争のさ中にある諸課題を取り上げている。多くはキリスト教の信仰、倫理、神学、教会にとって歴史的にも現時点においても挑戦となるものである。“聖地”と称される場所で起こっているなんとも恐るべき紛争をかんがみて、イスラエル/パレスチナに関する特別号を組んだ。

投稿された論稿がはっきり語るように、起こっている出来事は日々の動きにしろ、歴史的な根深さにしろ、余りに痛々しいので、こうした論争的な課題もそのまま出すに至っている。多様な声、視点、アプローチを紙幅の許す限りで載せるとはいえ、この雑誌はやはり現実が起こっていることを独自のやり方で映し出さざるをえないであろう。著者もピアレビュアーも編集者も、ここに投稿された諸論稿とそれらへの反応において納得したわけではなかった。したがってこのテーマは決して一つの号だけで終わる内容ではない。編集者たちは本号のあとにこの対立的な状況とテーマへの論稿を新たに募集して、さらに続く号で掲載していくことを決めた。本号の対立点は宗教的、政治的、社会的、環境的な事柄などいかなる強弱があろうとも、次号以下でさらに反映されるはずだ。各論文は適切に公共神学的に答えを探っている。文脈の多様さと同時に世界大に伸びた複雑なもつれに対して真正面から向き合おうとして、ブラジル、中国、フィジー、インドネシア、パレスチナ、英国、米国からの声が掲載されている。また、3人の優れた女性神学者たちから二つの論稿を受け取っているとはいえ、他のすべての著者は男性である。引き続きもっと女性の声を見出していきたい。

本号の最初の二つの論稿は公共神学の話題、もっとも話題といってしまうにはあまりに辛い人間の苦悩に関するテーマである。それでもE・マッキントッシュとA・M・ラナワナの共著論稿が示しているように、そこには学術的な考察があって、それがイスラエル国家とハマスの間の対立点、そして現在の政治の動きおよび戦闘とを理解する助けになっている。当然ながら書かれている視点は中立ではないが、しかし、その視点からコミュニケーションが発せられ、会話がスタートし、相互理解の希望の種がはらまれるだろう。たとえ一致点ももっと先であったとしても、とにかくそれを期待したい。そのような注意深いコミュニケーションこそが、公共神学が一つの学問分野として貢献できるところなのである。ただしそれは同時に、この何とも恐ろしい対立の深い神学的次元を明確にする。その対立は20世紀初頭に始まり、2023年10月7日のハマスの攻撃によって新局面に入ってしまったのであった。ただ、この日付に特別に焦点を合わせると、これまでの徐々に広げられたイスラエル国家の動きから目をそらすことになる。この動きとはパレスチナ地域への不法な入植であり、その占領地でのパレスチナ人への組織的な差別であり国家としての政治的展開にほかならない。もっとも、これもイスラエル国家から言わせれば、かつて世界地図の上から消えてしまったユダヤ人祖国の再興、ということになるわけだが。

エステル・マッキントッシュ (Ester McIntosh: ヨーク : 英国) とアヌパマ・ラナワナ

(Anupama Ranawana:バーミンガム:英国)の共著論稿「沈黙は共犯者:ジェノサイドに直面した神学の失敗」は西洋、特に英国の神学的文脈に焦点を当てる。彼らはこう述べる。一方に、デイトリッヒ・ボンヘッファーのような神学者たち(そして殉教者たち)に見られるような、豊かな批判的な公共神学の伝統がある。にもかかわらず、他方で今日の教会指導者たち、たとえばカンタベリー大主教や英国神学会のような諸神学研究所は、このイスラエル軍のガザ地区での戦闘行為に対して適切な公共神学的な応答をしていない。この状況を指摘した後に、彼らは解放の形と反植民地的な神学、特にパレスチナ解放の神学といったものの模索を試みる。今後に必要なことは、西洋の教会指導者たちや諸神学研究所が不名誉に非難されることを避ける、または沈黙や中立性の装いによって共犯者となることを避ける、そのための適切な応答ということであろう。

ヨセフ・アルコーリ(Yousef Alkhouri:ベツレヘム:パレスチナ)の「どの福音か?ガザでのイスラエルのジェノサイドにおける聖典の軍事化」という論稿は、まず、入植者自らの正当化のための聖書諸書の武器化、というところから始めている。著者自身はまさに植民地化されてしまったベツレヘムに住むパレスチナ人キリスト者という立場にある。つまりキリスト教とユダヤ教のシオニズムが植民地をつくり、定住化していくための核として利用されている。パレスチナを占有し、もともたにいる住民を排除することがすでにジェノサイドの域まで達している。これと並行して聖書諸書の武器化が進んでいる。AIシステムを“福音”と呼ぶに至っては、まさに“福音”は異なる意味で使用されているのだ。帝国主義的ないしは植民地主義的に変質した福音は、イエスの新約聖書での神の国(王国)の比喻をこの世の征服に利用した。パレスチナ人抑圧にも同じ論理が適用された。

以上の二論稿を読むと、アルコーリの論文が、まさにマッキントッシュとラナワナ論文への部分的な答えになっている。アルコーリはパレスチナ解放の神学(とさらに彼流に拡大したもの)を一つの声として発していて、西洋人はこれに耳を傾けよ、ということだからだ。そうでないと、マッキントッシュとラナワナが、西洋神学が共犯者になってしまうという言い方をしたことが当てはまってしまう。つまり、とりもなおさず西洋神学が聖書諸書を武器化して植民地政策に奉仕させた、ということが当てはまってしまうのだ。両論文は共に方法論としては文脈的神学となっているが、これは神学者がそれぞれにベツレヘム、ヨーク、バーミンガムに住んで神学的に応答しているからである。文脈を強調するとは言っても、ここでは二つの声がたまたま呼応したに過ぎない。この二論文が大いにわれわれの思考を活性化させ、さらに別の声、別の視点をもあることを教えてくれている。論争は始まったばかりだ。編集者たちは、イスラエル-パレスチナの対立に関する公共神学的な扱いの諸論文の投稿を再び促したい。軍事的なものや戦いを聖化してしまう、その歴史的な考察、そして難民化してしまった人々とその神学的な声についても聞くべきであり、それはキリスト教の伝統からはみ出したものであってもかまわない。

さらに「教会の公共的役割に果たしたボンヘッファー:今日のブラジルの政治的・宗教的シナリオ」、「コロナ禍の負の効果、グローバリゼーションと今日の奴隷制:相互依存、連帯、

根本の受容」、「動物にまで拡張された正義論に向けて」、「聖書神学の脱植民地化」、「フランシスコ教皇はマルキストか？」の五論文が掲載されている（略）。

ペーター・ベン・スミット

ルドルフ・フォン・ジンナー

ジェファーソン・ゼフェリーノ

International Journal of Public Theology 第18巻、第4号、2024年11月より（部分訳の文責：稲垣久和）